

水路開削した先人に光

島根県鹿島町はこのほど、宍道湖と日本海を結ぶ佐陀川を開削し、宍道湖沿岸の水害を克服した旧松江藩士の伝記を町村合併四十周年を機に発刊した。先人の偉業に光を当てた作品が、町民の郷土への愛着と誇りを呼び覚ますきっかけになっているようだ。

同町は県都松江市の北西に位置し、日本海に面する人口八千七百人の漁業が盛んな町。一九五六年、恵曇町を核に佐太、御津、講武の三村が合併して発足した。町を東西に横断する佐陀川は十八世紀後半に完成。松江市の宍道湖から県内有数の水揚げを誇る恵曇港まで約八キロを流れている。

伝記3部作を出版

同町は町村合併四十周年を迎えた九年、記念事業として同川を開削した先人の伝記を世に出すことを決めた。

伝記の主人公は松江藩士、清原太兵衛。宍道湖沿岸は十七世紀から頻繁に

洪水に見舞われていた。農家に生まれ太兵衛は幼いころから、水につかった湖岸の惨状を目にするうちに水害の克服を決意。松江藩に取り立てられ藩の要職にあっても初志を忘れず、新水路の開削を十二回にわたって藩に訴える。大飢饉（ききん）の天明四年（一七八四年）、七代藩主松平不昧がようやく工事を許可。時に太兵衛七十三歳。

自ら工事の陣頭指揮を執り、翌春に着工。湿地帯での難工事に犠牲者も出たが、一七八八年一月に新川は開通式にこぎつける。一方、太兵衛は竣工（しゅんこう）を目前に七十六歳で他界した。以後、宍道湖の水位は低下して洪水も減るとともに、湿地帯は田畑に生まれ変わり、川は松江と日本海を結ぶ通路となった。

伝記の出版はHNS研究所（松江 市、佐々木武男所長）に委託した。同研究所は地元ベンチャー企業の雄、小

松電機産業（同市）の小松昭夫社長が設立。「一村一志運動」として地域おこし事業の企画立案に取り組むなど、独自の活動で知られている。作品は子供からお年寄りまで家族全員で楽しめ、また子供が成長段階に応じた作品を読めるようにと漫画、児童文学、小説の

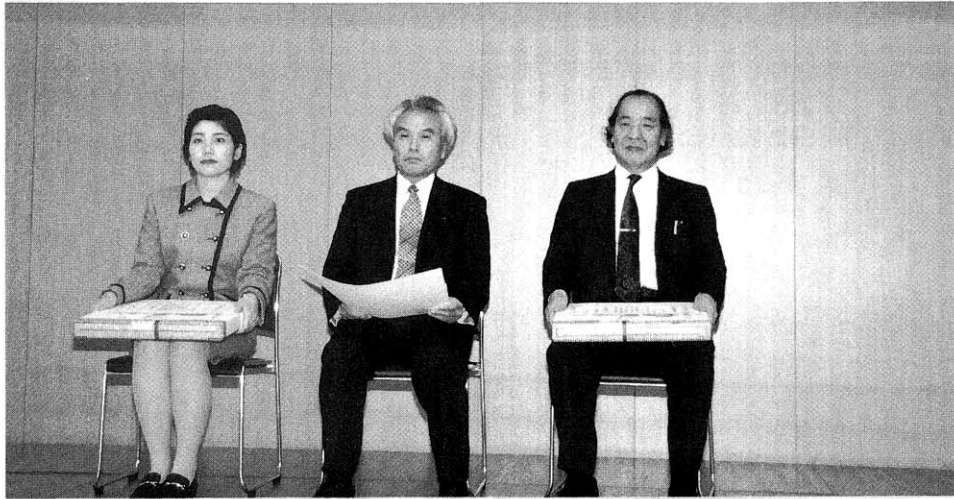
三部作とした。漫画は故手塚治虫さんに師事した小室孝太郎さんに、児童文学は県在住の作家、村尾靖子さんに委託。小説は懸賞金付きで一般公募したところ、町主催の現地見学会に二十一人が参加。最終的に九作の応募があり、農業経営問題の論文や歴史小説の執筆歴を持つ寺井敏夫J A島根共済連専務が一席を獲得した。

太兵衛の生き方に感銘

作品は初版一万五千部を発行。町内全二千五百世帯と小中学校に配布し、地元書店でも販売上位に食い込んだ。昨年、町が児童・生徒を対象に読書感

=島根・鹿島町=

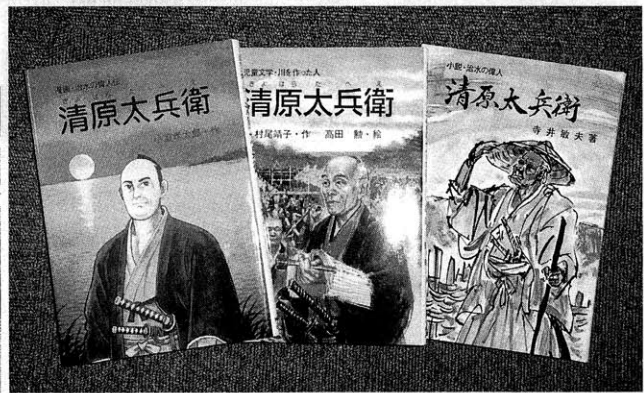
清原太兵衛翁顕彰事業 懸賞小説入選発表会



懸賞小説入選者。中央が1席の寺井敏夫さん



太兵衛が開削した佐陀川



伝記3部作

想文を募ったところ、三百三十九作の応募があった。最優秀賞の鹿島中学三年の安達洋子さんは「夢をあきらめなかったこと、そういう人がかつてここに存在したということが、私にはとても励みになります」と、太兵衛の生き方に強い感銘を受けたことを書いている。出版を引き受けたHNS研究所の佐々木所長も「今の子供は冷めているというが、大人がきっかけを作ってやれば熱くなることが分かった」と手ごたえを感じている。

松江市から町役場を経て恵曇港に向かう県道を走ると、佐陀川が一直線に伸び、人工河川であることが分かる。しかし、これまでは町民でさえ川をつくった太兵衛の名は知っていても、人柄や情熱まで知らない人が少なくなかったという。古瀬篤企画課長は、山本清澄町長の太兵衛顕彰への熱意が今回の出版を可能にしたと指摘した上で、「本を読んだ人が川を汚してはいけないとか、自分も太兵衛のように何か人の役に立ちたいと思うようになれば……」と期待を込めるとともに、「本として残り、人の心にも残る」と伝記出版の意義を語っている。